発達理論の学び舎

Back Number: Vol 102

Website:「発達理論の学び舎」

© YOHEI KATO 2019

目次

2021. 芸術能力の高度化について

2022. 友人の絵画に関する夢

2023. 永遠の謎の中で

2024. 書物と生

2025. 生きることと綴ること

2026. 激しい模倣

2027. 異界に通じる穴と巨石

2028. 現代社会の変わらぬ側面を指摘する夢

2029. 狂気さとライフワーク

2030. ウォルター・ピストンの書籍の到着

2031. 豪華な本棚の夢

2032. 作曲技術の発達過程を振り返って

2033. ブロッコリーの洗い方と仮想通貨に関する夢

2034. 永住権の取得について

2035. 魂の欲求

2036. バッハの曲とモーツァルトの曲

2037. 身体の充実

2038. あの太陽のところまで

2039. 水泳について

2040. ブレーキの利かぬ夢とシューベルト

© YOHEI KATO 2019

2021. 芸術能力の高度化について

ハワード・ガードナーの“The Arts and Human Development (1973)”という書籍は大変得るものが多かった。今から45年ほど前に執筆されたとは思えないほどに、本書の記述の大部分は色褪せていない。

本書の中でも最も関心のある箇所から順次読み進めていき、随所に書き込みを行った。現在のガードナーは芸術と人間発達にそれほど関心を持っていないのかもしれないが、本書に書かれている事柄に関していくつか実際に質問をしてみたいことが多々あった。

ガードナーは、ロバート・キーガンやカート・フィッシャーに並ぶ発達心理学の大家であるが、私はこれまでそれほどガードナーの仕事には関心を払ってこなかったように思う。実際に、私がガードナーの書籍を読み始めたのはオランダに来てからである。昨年、フローニンゲンの街の古書店でガードナーの書籍を見つけ、それを購入して以降、少しずつガードナーのこれまでの仕事を参照するようになった。

確かにガードナーは、ピアジェの流れを汲む発達心理学者であり、構造的な発達理論に造詣が深いのだが、どうも多重知性理論のイメージが先行していたために、これまではあまり彼の仕事に関心を持つことはなかった。だが、ここ最近になって、とりわけ本書をきっかけに、ガードナーの仕事には大変感銘を受けるものが多いことに気づき始めている。特に本書の主題でもある、芸術と人間発達というのは、まさに今の私を捉えて離さないものであるがゆえに、今後はガードナーの仕事をより丹念に参照することになるだろう。

優先的に読むべき箇所を本日全て読み終えたため、明日からは読み飛ばしている箇所を含めて再読を行いたい。初読の際にいくつもの示唆を得たのだが、本日読んだ箇所の中で最も印象に残っているのは、芸術における発達プロセスを説明する際に、ピアジェの段階モデルはそれほど適したものではない、という記述だった。

この記述に対してハッとするものがあった。確かに、知性の発達と芸術の能力の発達というのは関係性があるだろうが、優れた芸術家に果たして形式操作段階──あるいは後形式操作段階──の思考がどれほど必要だろうか、という疑問は以前からあった。

芸術の能力というのは、ピアジェのモデルでいうところの高度な段階特性、つまり論理を司る能力にそれほど依存することなく発揮されるケースは多分に見受けられる。優れた画家や優れた演奏家が高度な形式論理思考を持っているとは限らず、下手をすると、それほど高度な思考形態を保持していない可能性の方が高い。そのようなことを考えてみると、芸術の能力をピアジェの段階モデルで説明しようとするのはかなり乱暴だと言える。ただし、ピアジェの理論の核にある「階層的複雑性」という概念は、芸術の能力の発達にも十分適用可能だと思う。

階層的複雑性とは、対象となる能力や知性が発達すればするほどに、当該対象領域の能力や知性の複雑性が増すという現象である。これは芸術の能力においても当てはまる現象だと思う。というのも、芸術の能力は高度な論理思考を発揮する必要はそれほどなくても、高度なシンボル操作能力を発揮することが要求されており、それは芸術家の能力の高まりと共により複雑なシンボル操作を可能にするものに変容していく、というプロセスを見ることができるからである。

複雑なシンボル操作とは、より抽象的なシンボルを操作できると捉えたらいいだろう。例えば、一見すると複雑には見えない後期ピカソの絵画作品などは、高度に抽象化されたシンボル操作の末に生み出されたものである。そのようなことを考えていると、やはり芸術の能力をピアジェの理論を用いて、とりわけ形式論理思考や後形式論理思考の枠組みで捉えようとすることには無理があるように思えてくる。

ガードナーは本書を通じて、絵画、詩、音楽などの様々な領域の具体例を示しながら、芸術の能力の核には、そうした論理思考というよりも、イメージを司ることにより適したシンボル操作の能力があるということを指摘している。

芸術家が発揮する高度な能力は、言語を司る論理思考に単純に還元することはできないが、ガードナーも指摘するように、身体感覚とも密接に結びついた複雑なシンボルを操作する能力の発達的産物と捉えることならできそうだ。

今後は本書をさらに深く読み込むことと並行して、自分の実践領域である作曲と照らし合わせながら、芸術の能力の高度化について考察を深めていきたい。フローニンゲン：2018/1/17（水）20:59

© YOHEI KATO 2019

No.656: Melodies as the Life of Music

I realized again the importance of melodies in music. Melodies are absolutely the life of music. I have to horn my skills to create beautiful melodies. Groningen, 21:50, Tuesday, 1/16/2018

2022. 友人の絵画に関する夢

今日は随分と多くの睡眠時間を取った。一度五時に目を覚ましたが、結局起床したのは七時半であった。昨夜はいつも通りの時間に就寝したため、随分と寝ていたことがわかる。おそらくオランダに戻ってきてから十日が経ち、ここでもう一度身体に何らかの調整が入ったのだと思われる。

現在の時刻は八時を過ぎているが、まだ辺りは暗い。それでいて人々が通勤や通学に向かうために活動的になっている様子が伝わって来る。

窓の外を眺めながら、ぼんやりと昨夜の夢について思い出していた。夢の中で私は、大学のゼミの中でも、特に仲の良かった友人二人とどこかの旅館に宿泊していた。そこで何か特別なことをするわけでもなく、休暇がてらその旅館に訪れ、たわいもない話をしながらくつろいでいた。話の中で、友人の一人が随分と昔から絵を描いていることをその時に初めて知った。

なぜか旅館のその部屋には彼の絵が三枚ほど置かれていた。一つ一つの作品はとても大きく、額縁は横に2m、縦に1.5mほどであった。描かれている絵を眺めてみると、そこには種々の動物が描かれていた。犬や猿などが迫力をもって描かれていたのが印象的である。

背景の景色は森や山であった。ある一枚の絵画作品の背景として描かれていた山には雪が積もっていた。その絵の中で特に印象的だったのは、何匹かの猿が描かれていたのだが、彼らは一様に正面を向くことなく顔を隠すように背中をこちらに向けていたことである。それらの三つの作品を見ながら、私は絵を描いた友人に話しかけた。

私:「作品の時代を追うごとに絵の技術が向上してるね」

友人:「そう？」

私:「うん。それにしても、猿が描かれているあの絵は面白いね」

友人:「あれは中学校時代に勉強していたある画家の絵画を真似しながら描いたものなんだ」

私:「何という名前の画家？」

友人:「マクルーハン。1400年代に活躍した画家だよ」

私:「マクルーハン？聞いたことあるようなないような・・・」

おそらく、マクルーハンという画家は実在しないだろう。しかし、友人が口にしたその画家の名前が鮮明に記憶に残っている。

夢の中でその友人は、中学校時代のある友人から絵画を描いてみないかと誘われ、それ以来絵画をひっそりと描き続けていたようだ。大学時代に私は彼と多くの時間を過ごしていたにもかかわらず、彼が絵を描いているなど全く知らなかったのである。

旅館の一室で絵画について友人と話をしていると、私の小学校時代からの友人が三名部屋にやってきて、「旅館から出る時間だ」と告げた。どこに行くのかも定かではないが、私はまた別の場所に向かって行くようだった。

旅館の外の駐車場に停まっていた友人の車の後部座席に乗り、車が山間の道を走り始めたところで夢の場面が変わった。フローニンゲン:2018/1/18(木)08:28

No.657: After Snowmelt

It was snowing in the early morning in Groningen. Looking at the outside from the window, I can see a rug of snowflakes on the road. What comes after snowmelt would be a dulcet world saturated with vital force. Although cold days still continue, I often imagine such a world after snowmelt. I suppose that the world after this severe winter already exists at this moment right now once I envisage it, doesn't it? Groningen, 09:07, Wednesday, 1/17/2018

2023. 永遠の謎の中で

今日は最高気温が5度、最低気温が1度と、フローニンゲンにしてはそれほど寒い日ではないのに、どこか寒さを感じさせる。それはこの鬱蒼とした雨雲のせいかもしれないし、それ以上に、今激しく降り注いでいる雨がそのように感じさせるのかもしれない。窓越しから通りを眺めてみると、道行く多くの車の屋根には雪がうっすらと積もっている。この激しい雨によって、通りの雪はだいぶ溶けているが、それでも少しばかり雪がまだ残っている。これらの風景が総合的に得体の知れない寒さを自分に感じさせているのかもしれない。

予報では、今日は一日中雨であり、すでに四日分の食料を一昨日に購入しているので、今日は外に出る必要がない。これから終日雨を見ながら仕事に取り組むことになるだろう。

昨夜は少しばかり、言葉について考えていた。考えていたと言ってもそれほど真剣にその主題を扱っていたわけではなく、頭の中でぼんやりとそれについて思いを馳せていたにすぎない。

作曲をすればするほどに、言葉というものについての関心が高まり、自分自身の言葉の感覚や感性も少しずつ変化しているように思える。昨日焦点を当てていたのは、言葉を用いて思考すること、言葉を用いて生きることの価値についてであった。

言葉を用いている自分の内側に意識を向けると、言葉を活用する際にはそれに対応する身体感覚が存在することがわかる。言葉を用いるということは、単なる思考運動ではなく、まさに身体運動であるということがここからもわかる。

自らの言葉と身体を動員しながら思考を進めていくと、いつも新たな差異がそこに生まれることに気づく。あるいは、何か古い皮が剥け、新しい皮がそこに姿を現わすような感覚があるのだ。それは何だろうかと考えを巡らせてみると、一つには「意味の皮が剥ける」ということが起こっているようなのだ。一つの現象に内包されている意味は無限の階層性を持っており、どうやら言葉を用いて対象と真摯に向き合うと、必ず古い皮がめくれ、新しい意味がそこに顔をのぞかせるようなのだ。

ここで興味深いのは、新しい意味というのは、何か啓示的な発見に似たような解放感のあるものではなく、往々にして新たな謎である。あるいは、それは新たな問いと言ってもいいかもしれない。つ

まり、意味の皮が剥けた後に生まれてくる新たな意味は、何かの解決を示すものでは決してなく、確かにそれは既存の問いを少なからず解決してくれるものなのだが、結局また新しい問いを私たちに投げかけるようなものなのだ。

私は、毎日こうした意味の皮が剥ける経験をしているように思う。それはすなわち、私は毎日新たな謎に向かって生を一歩前に進めていることを示唆している。無限に続く謎、無限に続く問いの中で私は今を生きているようなのだ。そうしたことが明瞭に知覚され始めたのは、やはり自分の言葉で考えるということ、しかもそれを文章の形で記録し続けているということが大きいかもしれない。

毎日、日記として日々の取り留めもない思考と感覚を書き留めているのは、結局のところ、永遠に創出される謎の中を自覚的に生きようとする意思によるところが大きいだろう。そこからさらに、「ではなぜ私は無限に続く問いの中を自覚的に生きようとするのか？」ということを考えていた。

自分の身体の奥深くにそのような問いを投げかけてみると、返ってきたのはこれまでの回答と似ていながらにして、若干差異を含んだような回答だった。言葉と身体を総動員して永遠に続く謎の中を自覚的に生きようとするのは、それがやはり自己の存在を深めることにつながるからなのだろう。自己の存在の深まりというのは、結局のところ、有限なこの一回限りの生の深まりを指す。

昨夜、就寝に向けて洗面台に立っている時、「では、なぜ私は生を深める方向に駆り立てられているのか？」という問いが新たに立った。その問いに対しては言葉を当てることをせず、私はそのまま寝室に向かった。フローニンゲン：2018/1/18（木）08:55

【追記】

「永遠の謎の中で生きる」と記述する際に、実はその前に「永遠の謎の上を生きる」という言葉の方がふさわしいように思えた。考えあぐねた結果、「中で」という表現を用いたが、「上を」という言葉にもどこか捨てがたい身体感覚が伴っている。

私たちは謎の中を生きるのか、謎の上を生きるのか。自分は謎の中を生きているのか、謎の上を生きているのか。それはまだはっきりしない。だが、私の中には、謎の上に立つというところにまで到達しておらず、人生を取り巻く謎に対してある種の敬意があったことは確かであり、それが「上を」という

表現を用いることをためらわせた。まだ私は永遠に生み出される謎を超越しておらず、永遠の外に立つ形で永遠として生きることはできない。そうしたことから、「永遠の謎の中で生きる」という表現を選ぶことにしたのだと思う。2018/1/18(木)09:01

No.658: Multilevel Analysis

I learned multilevel analysis in the advanced research methods course. The professor's explanations were crystal clear, which helped me grasp the gist of the method.

It may be needless to mention that multilevel analysis is quintessential for educational and sociological research. One of the most interesting characteristics of the method for me was that it could deal with macro and micro levels simultaneously and investigate their interactions without aggregating data and without violating the independency of data.

Although I'm not so certain of whether I will use multilevel analysis in my research, the knowledge I obtained from today's lecture would be beneficial to wisely read articles that utilize the method. Groningen, 18:04, Wednesday, 1/17/2018

2024. 書物と生

私が書物を読み始めたのは非常に遅く、大学生に入ってからのことであった。しかし、大学時代には本を読んでいたというよりも、本の中身を眺めていたに過ぎなかったように思う。そうした意味で私が本当に本が読めるようになってきたと自分で思えるようになったのは、二十代の終わりであり、それは随分と遅いように思える。

他者の書いた言葉を読むことは、こうも苦痛であり、こうも忍耐を強いるものに思われていたのは、おそらくそれまでの私が本物の言葉に出会ってこなかったからかもしれない。

二十代が終わりに差し掛かった頃、何のきっかけかわからないが、私は徐々に本物の言葉に触れる機会が多くなった。そうした幸運を契機とし、私は少しずつ本が読めるようになってきたのだと思う。しかし、今また書物の意義について考え直している。

ある一人の他者の存在が滲み出しているかのような書物は確かに読む価値がある。だが、果たして書物を読むだけでいいのか？という非常にシンプルな問いが頭を巡る機会が多くなっている。より正確には、書物を読むことよりも優先されるべき何かがあるのではないか？という問いが頻繁にやってくるのだ。

やはり私の中で書物を読むことよりも優先されるべきことは、とにかく自分の言葉で文章を書くことなのだと思う。ここで述べている文章とはもちろん作曲を含む。

日々自分が考えたことや感じたことを言葉として曲として表現することが、私にとっては何にも増して重要なのだと改めて知る。学術研究をしている立場上、確かに私は日々、専門書や論文などの他者の言葉に触れることを余儀なくされている。だが、他者の言葉の世界の中に埋没しているだけであってはならないのだ。

もちろん私は今後も、真摯に思索や研究を進めた者の言葉には耳を傾け続けるだろう。しかしながら、他者の言葉に寄りかかるよりも、とにかく自分の言葉を紡ぎ出すことに邁進するべきなのだと思う。そこにはやはり、一人の人間が持つ固有の世界と固有の生という主題が関係しているだろう。

他者が自分の代わりに私の生を生きてはくれないのである。また逆に、私は他者の代わりに他者の生を生きることはできないのである。そうしたことから、やはり自分にできるのは、自らの生を生きるということであり、そうした至極単純かつ尊い事柄に行き着く。

断片的であっても一向に構わない。考えることのできたところまで書く。あるいは、現時点での思考や感覚があるべきところで落ち着くところまでそれを表現すればそれでいいのである。今日もそうしたことを日記として、曲として具現化させていく。

私はどこまで自分の生を生き切ることができるのか定かではない。この生を最善最良に生きるための手段として日記と作曲があるのであれば、私はそれだけに従事したいと思う。フローニンゲン：2018/1/18（木）09:25

No.659: Learn as Children do

The essence and difficulty of adult learning may depend on whether they learn like children do. Of course, I have to emphasize differences between children and adults and to underline the trap of "pre-trans fallacy." However, we, adults possess too many unnecessary constraints that thwart our learning.

When I learn music composition, I don't want to forget how children learn. Keeping that in mind, I would continue to develop my composition skills. Groningen, 20:00, Wednesday, 1/17/2018

2025. 生きることと綴ること

起床してから相変わらず日記を書き続けている。他のことなど一切せず、ただ自分の内側の思念を外側に形として残すことだけに従事している。だが、それは真に自分の人生を生きているという感覚を生み出す。自分の言葉を綴り続けることが、不思議なほどに生の実感を私にもたらす。

「言葉は存在であり、存在は言葉である」そのような言葉をどこかの日記で書き留めていたことをふと思い出す。

その時の自分の言葉はそれなりの、いや極めて強い妥当性を持っているように今も思われる。自分の言葉で文章を書くことは、自分の人生を確かに生きているという強い実感を与えてくれる。しかしながら、生に対して実感を持とうと努めているのは、もしかすると生に実体を求めることにつながりはしないだろうか、という考えが浮かぶ。仮に生というのもの本質が、実体を超えてただそこにあるだけのようなものであれば、生に実体を見出そうとするのは単なる幻想に過ぎないだろう。

自分が今、自らの生を生きようとする意思は、実体を超えて「そこにただあるのみ」という生の本質の境地から生まれたものなのか、それとも生に実体を求める幻想と生への種着から生まれたものなのかは区別がつかない。両者の差異を見極めていくことは、自分に課せられた新たな課題なのかもしれない。

書斎の窓から外を眺めると、早朝からの激しい雨が止んでいた。しかし、これは一時的な休息であって、休憩を済ませた天気は再び雨を降らせるだろう。雨が止み、目の前の通りに植えられた裸の木々

が風に揺られているのを眺めていると、何気なしに吉田兼好の生き方を思い出した。彼もまた徒然なるままに文章を書き、文章を書き続けることで真に生きた人であった。

日々の徒然なる事柄を徒然なるままに書き続けるだけの生活があっていいのではないか、と最近よく思う。まだ良い表現が思い浮かばないのだが、日々を徒然なるままに綴っていく人生というのは固有の価値と尊さを持っているように思えて仕方ないのである。

自分の人生を生きるというのは、自らの人生を綴ることではないだろうか。画家のムンクに多大な影響を与えたノルウェーの自然誌家ハンス・イエーガーがかつて、「自らの人生こそを著せ」という言葉を述べていたことをふと思い出す。また、発達心理学者のロバート・キーガンも「自己著述」という人間の本能に根ざした特性について言及している。

人生を著述する手段は様々にある。私にとって、日記や作曲がその手段なのは間違いない。

人生を綴ること、真に自らの生を生きることが何か特別のものであるかのような幻想を抱かせ、自らの人生を著述することを妨げるような見えない力がはびこっているこの世界はどこかおかしくないだろうか。

無言の雨がまた降り始めた。窓ガラスに断続的に激しくぶつかる雨。

目の前の裸の木々が先ほどよりも激しく風に揺られている。一羽の黒い鳥が激しい雨風の中を飛び去っていった。

生きることと綴ること。そして、生きた後と綴った後のことについて、私の考えは止みそうもない。そうした考えは、今降り続けている雨よりも長きにわたって続くものだろう。フローニンゲン：2018/1/18（木）09:53

No.660: Literature Search

After lunch, I'll search for some literature on characteristics of good texts or talks in order to justify the metrics in my research. In addition, I need some articles about the relationship

between variability of texts or talks and their quality. Database search will be my first task after lunch. Groningen, 10:38, Thursday, 1/18/2018

2026. 激しい模倣

昨日、ハワード・ガードナーが執筆した芸術と人間発達に関する書籍を読んでいると、自分の心を動かす一つの記述に遭遇した。その記述の周辺には、過去の優れた作曲家たちがいかにして作曲技術を磨いていったのかについて書かれていた。バッハにせよ、ベートーヴェンにせよ、彼らは作曲家としての人生を歩む道程で、過去の作曲家の作品を激しく模倣する時期があった。まさに「激しく」である。

数週間前に、ヨハン・ヨーゼフ・フックスという17世紀後半から18世紀初頭にかけて活躍したオーストリア人の作曲家が執筆した“The study of counterpoint (1965)”という書籍を読んでいる最中、その序文に、ハイドンやモーツァルトもこの書籍に範を求めていたことを知った。特にハイドンは、この書籍が擦り切れるまで繰り返し本書を読んだそうだ。まさにハイドンが行っていたのは、対位法に関するフックスの理論の模倣であり、完全な模倣を目指して日々研鑽に励んでいたようなのだ。

日本の伝統芸能において、「守破離」という考え方があり、過去の先人の技術を模倣し、そこから自分の固有な技術を確立することの重要性は頻繁に見かける議論である。しかし、それがどんなにありふれた議論であっても、いやむしろそうした指摘が頻繁になされるというのは、それがある真理を提示しているからなのではないだろうか。

発達心理学者のレフ・ヴィゴツキーも、子供たちの発達における模倣の重要性を指摘している。子供たちは、他の子供や大人たちの言動を模倣する形で種々の能力を伸ばしていく。それと同じことは、私たち大人にも当てはまるだろう。特に、ある領域における技術を磨いていく際に、それがとりわけ歴史のあるものであればあるほどに、歴史の経過によって積み上げられた叡智が存在しているがゆえに、過去の先人の知恵や技術を模倣することは大切なことのように思える。

ここ最近、私は作曲をする際に、過去の作曲家の楽譜を参考にしながら曲を作ることを特に意識している。バッハやベートーヴェンを含め、過去の偉大な作曲家がある時期に集中的に他の作曲家

の作品に範を求め、そこからできるだけ多くのことを学び得ようとしていたのと同じことを私も行う必要があるだろう。

おそらく私にはまだ、模倣の激しさが足りていない。それは既存の作品から多くのことを学び取ろうとする態度が欠如しており、過去の曲を基にして自分の曲を作る量においても不十分である。ここからは、模倣に次ぐ模倣、激しい模倣を集中的に行っていく。過去の作曲家の作品に範を求めながら、膨大な量の習作を生み出す過程を通じて、徐々にいろいろなことが見えてくるだろう。フローニンゲン：2018/1/18（木）10:29

No.661: Rigorous Imitation

As most past great composers did, I'll horn my composition skills through rigorous imitation. Bach, Haydn, Beethoven, etc. established their own styles by imitating other composers. The fact gives me tremendous encouragement.

I'll emulate as many past works as possible, which is the first developmental process to establish my unique style in the future. Groningen, 10:53, Thursday, 1/18/2018

2027. 異界に通じる穴と巨石

昨日は雨が降り続け、今日も雨のようだ。今日だけではなく、明日もまた雨のようであり、さらには今日と明日の天気予報には雪マークが付されている。そうした天候の中、「雨」という言葉を「私の人生」という言葉に置き換えることができることは、一つの大きな希望だろうか。つまり、昨日も、今日も、明日も私の人生であることに変わりはないということである。

昨日から一日経ったのに、一昨日の夜の夢の後半の内容をまだ覚えている。夢の前半についてはすでに書き留めていたが、後半についてはまだ書き留めていなかった。夢の後半の内容が書き留められることを待っていたかのように、依然として私の記憶の中にその内容が残り続けている。

夢の中で私は、友人が運転する車で山道を走り、山の中腹で降ろしてもらった。車が停車した地点から山の方を眺めると、そこには何かを祀っている神社が見える。また、神社に向かって山を登っていく階段がすぐ近くに見える。その階段に向かって歩き出そうとした時に、私はハッとするように、神

社のある一角を除いて、辺り一面が雪に包まれていることに気づいた。自分の足元を見ると、私は分厚い雪の層の上にいることに気づいたのである。

そうした気づきに相まって、私の足元にはリードに繋がれた愛犬がいた。そして、私はリードを握っていることに今ようやく気づいたのである。

私は愛犬と共に、神社の本殿に向かって階段を登りだした。階段を上る足取りに合わせて、なんと愛犬の大きさがみるみるうちに小さくなっていくことに気づいた。そして、愛犬は階段横の道にある雪の穴の方に関心を示し、その穴の中に入ろうとしていた。その穴がどれほど深いものかわからず、仮に愛犬の大きさがますます小さくなってしまったら穴の奥へと入って出れなくなってしまうのではないかと私は心配した。すると案の定、愛犬はリードで繋ぐことができないぐらいに小さくなってしまい、穴の奥の方へと滑り落ちていった。

穴の深さがわからないことは私を不安にさせ、愛犬の様子を大いに心配したが、その穴はどうやら別の世界につながっていることが何となくわかり始めた。

穴の奥から愛犬の声は聞こえず、生命を持つものに固有の存在感というものがもはやそこには一切なかった。消えた存在感をもってして、私は愛犬がこの穴を通じて別の世界に行ったのだということを確信した。そうした確信が芽生えた時、私はなぜだか本殿まで階段で上がっていく必要性を感じなくなった。その穴を境目とし、私は元来た道を戻ることにした。

友人の車が停車した地点まで戻ってくると、もはや友人たちはそこにはいなかった。だが、辺りを見回してみると、何かを祀っている石板のようなものを見つけた。それは人や動物の形を模した石像ではなく、巨大な石板だった。いやそれは石板というよりも、巨大な石だと行った方が正確かもしれない。

その巨大な石には何やら文字が刻まれていたが、私には解読することができず、どのような意味を持つ文字なのかさっぱりわからなかった。石の下の方を覗き込んでみると、石の裏手からひょっこりと見知らぬ人が顔を出した。私は少々面食らったが、どうやらその方は地元の人らしい。

© YOHEI KATO 2019

親切にもその方は、この巨大な石についてこれから説明をしてくれると述べた。この石に刻まれた文字の意味や、そもそもこの石の存在理由について、そしてあわよくば、先ほど愛犬が落ちていった不思議な穴についても話を聞きたいと思っていた。その方が口を開けてこれから何かを説明しようとした瞬間に、夢が終わりを告げた。フローニンゲン：2018/1/19（金）06:52

No.662: In the Ceaseless Rain

Yesterday was rainy, and so is today. How about tomorrow? It'll be rainy too. However, what I can replace "rainy" with "my life" provides me with a hope. Yesterday, today, and tomorrow are my life, which is unchanging. Groningen, 11:05, Thursday, 1/18/2018

2028. 現代社会の変わらぬ側面を指摘する夢

一昨日の夢について振り返ると、昨夜の夢についても少しばかり記憶が蘇ってきた。夢の中で私は大きな体育館のような場所にいた。

私は高校生という身分のようであり、一生徒としてその場にいた。日本の大手企業の社長を何名かこの体育館に呼び、どうやらこれから彼らの講演会が行われるらしい。

講演会の内容は事前に明かされていなかったが、講演会の後に、各講師たちが科目でいうと「現代社会」や「政治経済」についての話もしてくれるとのことである。しかし、それは話というよりも受験対策の一環であることが私にはわかっていた。

その体育館には椅子のようなものは見られず、私は体育館の最前列で地べたに座り、体育座りをしたり時折あぐらをかいたりしながら講演者の話に耳を傾けていた。体育館の壁側に高校教師たちが立ちながら、講演者の話を有り難そうに聞いている。私の周りを見渡してみると、他の生徒たちも熱心に話を聞こうとしているようなのだが、その内容についてはほとんど理解していないようだった。私は周囲に対する観察を継続しながら、講演者の話を耳に入れながらも自分の考えたいことだけを考え続けていた。

講演が終わり、拍手が場内に響き渡った。拍手に応じるかのように、それぞれの講演者は丁寧にお辞儀をした。そしてそこから、講演者による受験対策を兼ねた講義が始まった。最初の講義を担当

するのは、日本を代表するある企業の社長であり、彼はまだ50代前半ぐらいの年齢だった。その場にいた私は高校生だったが、すでに日本の大学を随分と昔に卒業しており、事前の情報によると、その方は私の大学の先輩であった。

その方が現代社会について講義を始める前に、彼の横に立っていた現代社会を受け持つ高校の教師が口を開いて一言述べた。

教師:「今登壇しておられるXXさんに放課後の補講を担当していただきます。そこでは難関校に必要とされる高度な自由記述式問題の対策を兼ねた指導をしていただくことになっています」

教師の横にいた講演者の社長:「私も大学入試に際して自由記述式問題の対策には手を焼きましたが、補講ではそのコツをお伝えし、回答への添削を丁寧に行います」

二人はそのように述べた。周りにいた生徒たちも補講に対して大きな期待を寄せているような目をしていた。また、壁際にいた他の教師たちも補講を有り難がっているようだった。しかし、私だけは唯一、二人の発言に妙な気持ち悪さを持っていた。そのため、挙手をし、二人に質問することにした。

私:「すいません、質問よろしいですか？」

講演者の社長:「ええ、どうぞ」

私:「あの～、どうして・・・笑」

講演者の社長:「どうかされましたか？」

私は質問の言葉を選びながら、笑みがこぼれていた。

私:「単刀直入に申し上げると、どうしてそんなに馬鹿なんですか？」

講演者の社長:「えっ？」

私:「他に適切な言葉がすぐに見つからなくて申し訳ないのですが、どうしてお二人はそんなに馬鹿なんですか？」

講演者の社長とその横にいた教師に向かって、私はそのように質問をした。二人は私の質問の意図が分かっておらず、さらにはそれを侮辱の言葉だと受け取ったのか、かなり困惑した顔をしている。私は心の中で、その言葉を侮辱と受け取り、そのような反応を示すことがまさに、質問が示唆している愚かさの表れなのだと思っていた。

その質問の裏にはさらに、大手企業の社長に入試対策の補講を依頼する教師とそれを引き受ける社長に対して、二人が生きている世界の狭さと盲点は、現代社会に生きる多くの人たちの世界の狭さと盲点と瓜二つであるという考えがあった。

私の質問が幾分単刀直入であったためか、体育館中が静まり返っていた。すると突然、私の背後から拍手が聞こえ始めた。一人の拍手、また別の人の拍手と、拍手の渦はどんどんと高まっていった。今もまだ状況が飲み込めていない壇上の社長と教師は、相変わらずキョトンとした顔をしている。

二人に対しては少しばかりの諦めの感情が芽生えたが、私の質問に拍手を送ってくれたその場の何人かの生徒たちには少しばかりの希望があった。諦めと希望の入り混じった気持ちを抱え、会場の拍手を聞きながら、私は体育館を後にすることにした。そこで夢の場面が変わった。フローニンゲン:2018/1/19(金)07:34

No.663: Garbage and Treasure

Any tiny memos that capture thoughts and feelings at that moment are significant. Garbage is garbage, but at the same time, it is treasure. On the other hand, treasure is treasure, but simultaneously, it is garbage. Groningen, 08:08, Friday, 1/19/2018

2029. 狂気さとライフワーク

今日は早朝にバッハの曲を参考にしながら曲を作った。楽譜を精査していると、単純にバッハの曲を聴いていてもわからないようなことに気づかされる。楽譜の中にバッハの創意工夫が溢れている

姿を見るにつけ、改めてバッハは美を体現させた知性に基づいて構成的に曲を作っていったのだとわかる。

現在取り組んでいるアーノルド・ショーンバーグの書籍に掲載されているバッハの具体例を見て、それをもう一度実際の楽譜で確認し、その曲を何度も聴くということを行っている。楽譜を分析し、何度も曲を聴き、そしてその曲に範を求める形で自分の曲を作っていくという実践を今後も継続させていく。この実践を毎日絶え間なく続けていけば、作曲技術の確固たる土台がいつか出来上がるだろう。

昼食時にふと、人は固有の狂気さを内に秘めているのではないか、ということに考えを巡らせていた。もしかすると、私が毎日日記を書き続けていること、毎日作曲をしていることは、自分に固有の狂気さの表れだと言えるかもしれないと思ったのである。そして、こうした狂気さこそが、その人のライフワークの礎となるのではないか、と考えていた。

狂気さを抑圧し、狂気さを否定的に捉えようとする社会の流れとは逆向きに歩いていく。逆向きに歩く中で、狂気さが具現化された表現物をうまく社会の中に還元的に流し込んでいく術を今後は考えていく必要があるだろう。

ぼんやりとそのようなことを考えていると、夕方前の歯医者の予約の時間が迫ってきた。自宅を出発し、背筋を正されるような寒さの中を歩きながら歯医者に向かった。

街の中心部にある行きつけの歯医者は、フローニンゲン大学の学生に人気があり、終日予約で埋まっていることが多い。歯医者に到着し、受付を済ませ、しばらく持参した音楽理論のテキストを読んでいた。10分ほど書籍を読み進めていると、私の番が来た。昨年歯医者に来て以降、歯科医の助言通り、半年に一回は歯の検診を受けている。

今回の検診では虫歯はなく、勧めてもらった電動歯ブラシを使っていたことと歯茎を鍛えるために歯間スティックを使っていたことの効果があったようだ。ただし、電動歯ブラシで少し強く歯を磨きすぎていたためか、二本の歯の歯茎に傷があるようであり、半年に一回のクリーニングに合わせて、歯茎と歯の隙間を埋める治療を次回にしてもらうことになった。

© YOHEI KATO 2019

検診が終わって治療費を払うと、突然みぞれが降り始めてきた。みぞれと言うと地面にぶつかるとすぐに溶けそうだが、それは一切溶けることなく固形物のままの姿をしている。おそらくそれは、あられと言った方がいいだろう。大量のあられが空から舞い落ち、パチパチと地面にぶつかっていた。こうした風景もまた一興であると思い、私は歯医者で待機をすることなく、折りたたみ傘を広げて自宅に戻ることにした。フローニンゲン：2018/1/19（金）16:50

No.664: Unique Insanity

Human beings may have a certain type of intrinsic insanity. What I keep a journal and compose music everyday could be a manifestation of my unique madness. Our life work may be an embodiment of our own insanity. Groningen, 08:52, Friday, 1/19/2018

2030. ウォルター・ピストンの書籍の到着

歯医者から自宅に戻る途中に、不在届の通知を持って近くの郵便局に立ち寄った。今の自宅のベルは耳につくほど激しい音が鳴るため、いつも電源を切っている。そのため、外から誰かが呼び鈴を押しても一切聞こえない形になっている。呼び鈴がならないような設定にしていても、ポストに入る郵便物に関しては問題なく、オランダではポストに入らない郵便物も大抵は近隣の住人が預かってくれることになっている。こうした事情もあり、郵便物の受け取りには困らないし、私の元を訪れる人もいないため、呼び鈴の電源を四六時中切ることにしている。しかし、EU県外の郵便物だけはどうしても本人が受け取らなければならないようであり、そういう時は不在届が郵便受けに入っている。

今回の郵便物に関しても不在届がポストに入っており、それを持って近くの郵便局に行くことにした。郵便物と言っても常に書籍なのだが、郵便局でほどなくそれを受け取り、自宅に帰って早速中身を確認した。中身の見えないビニール袋に包まれていても、その大きさと硬さからハードカバーの書籍であることがすぐにわかり、注文しておいた書籍のうちのどれがそれであるかは中身を見ずともすぐにわかった。

ビニール袋から中身を取り出してみると、案の定それは、作曲家のウォルター・ピストンが執筆した“Harmony (1978)”であった。ハーモニーに関しては、チャイコフスキーとショーンバーグのテキストをすでに持っているが、最後にピストンのものを購入しておこうと思った。正直なところ今はまだ誰の

テキストが今の自分にとって最も使いやすいのかわからず、とりあえずそれら三名の作曲家のテキストを比較することにした。

本日受け取ったピストンのテキストは600ページに及ぶ大著だが、具体例とエクササイズが豊富であり、なおかつ文字も読みやすい。印象としてはかなり使いやすいテキストのように思える。今後少しずつ本書に取り組んでいきたいと思う。

今日はこれから夕食後にかけて、研究計画書をさらに執筆していこうと思う。ちょうど先日、研究アドバイザーのミヒャエル・ツショル教授から連絡があり、研究計画書の字数制限が幾分拡大されたため、追加で文章を執筆する必要性が出てきた。これまでの字数制限はむしろ短すぎると感じていたため、私にとっては好都合であった。

昨日、追加で文章を執筆するために用いる引用文献を再度調査してみると、いくつか良い論文を見つけることができた。今回字数が広がったおかげで、それらの論文を発見することができたことは幸運であった。追加するべき文章のイメージはすでにあるため、執筆作業にはそれほど時間がかからないであろうと予想される。論文の執筆が終われば、残りの時間は作曲実践に充てたい。フローニンゲン：2018/1/19（金）17:27

No.665: Bach's Works

Since yesterday, I have continued to listen to Bach's music played by Glenn Gould. In addition, I've recently emulated Bach's works when I compose music. Whenever I thoroughly examine his music scores, I can notice his hidden intentions and his elaborate arts. I'll refer to one of his works today too. Groningen, 08:59, Friday, 1/19/2018

2031. 豪華な本棚の夢

日本からオランダに戻ってきて早くも二週間が経とうとしている。今はもう以前の生活リズムを取り戻し、生活もだいぶ落ち着いている。こうした落ち着きのおかげもあり、以前と同様に充実した日々を過ごすことができている。

昨夜は夢の中で、見知らぬ人と知人を交えてコンテンツ産業について意見交換をしていた。知人と私の意見は正反対のものだったが、見知らぬ人と私の意見は完全に合致していた。端的にはデジタルコンテンツの拡大の最中にあっても、実物コンテンツの質いかんによってそれらは淘汰されることはない、という意見を私と見知らぬ人は持っていた。例えば、いくらデジタルコンテンツが普及しても、私のように紙媒体で書籍を所有するとに意義を見出している人間がいるように、実物コンテンツの特性いかんによって、それに対して固有の愛着が喚起されることがある。私はその場でそのようなことを述べていた。

昨日、近所の郵便局から自宅に帰ってくる最中に、一軒のレンガ造りの家の一階の部屋の中が見えた。オランダは高さの低い住居がたくさんあり、カーテンを閉めていない場合が多く、中が外から見えることがよくある。その時に偶然中が見えた家には、壁一面に置かれている本棚に大量の書籍が収納されていた。きっとここの住人も、書物をデジタルではなく実体として所有することのある魅力に取り憑かれているに違いない、と思った。

夢の中で見知らぬ人と知人と意見交換をした後、私はそこが学校であることを初めて知った。どうやらそこは昔通っていた中学校であるらしく、私はふらふらと職員室の方に向かっていった。職員室に到着すると、教師の一人が声をかけてきた。

教師:「加藤君に何やら届け物があるみたいだぞ」

私:「届け物？何でしょうか？」

教師:「立派な本のようだ」

職員室の入り口で教師と言葉を交わした後、すぐに職員室の中を覗くと、職員室の真ん中に木製の立派な本棚が置かれているのに気づいた。それはガラス張りの立派な本棚で、中には希少価値のある書籍が収められていた。豪華な本棚とそこに収められた希少な書籍を眺めながら、私は息を飲んだ。すると、横からまた別の教師が声をかけてきた。

別の教師:「とても立派な本棚だね～。中に収められている本もいい」

私:「そうですね。ただ、和書しかないようです」

私はそのようにつぶやくと、確かに上段には和書しか収納されていなかったが、最も段の低い場所には英文の科学雑誌が収められていた。ただしそれも“Science”や “Nature”という雑誌の類であり、気晴らしに読む分にはいいが、仕事上で読むようなものではなかった。

本棚全体に収められている書籍をもう一度全て確認し、私はこの本棚ごと全てを学校に寄付することにした。そのように決心したところで夢の場面が変わった。フローニンゲン:2018/1/20(土)07:01

No.666: Gentle Going Out

It is not so abominable to “gently” go out from our inner world to the outer world. I thought so, listening to my music and looking at the outside from the window. Groningen, 09:06, Friday, 1/19/2018

2032. 作曲技術の発達過程を振り返って

今朝は六時過ぎに起床し、六時半から一日の活動を開始させた。今日も午前中は、日記の執筆と作曲実践に充てたいと思う。文章を書く習慣に加えて曲を作ることが新たな習慣として完全に定着したようだ。ここのところ、毎日かなりの時間を作曲に充てている。文章を書くことと曲を作ることは、日々の生活をより豊かに実りあるものにするためにも不可欠であり、今後も今のペースで実践を継続させていく。

私が作曲理論を学び始めた正確な時期は過去の日記を読み返してみないとわからないのだが、せいぜい数ヶ月前のことだったと思う。当時は諸々の仕事との兼ね合いから、作曲理論の学習に時間を割くことがままならず、作曲実践のリズムを掴むことができていなかったように思う。おそらく真にリズムを掴み始め、作曲実践を毎日行うようになったのは、ほんのここ一ヶ月ぐらいの話かもしれない。

年末に大学が休みに入る直前から毎日作曲をするようになり、それを継続させていくことによって、今は毎日曲を作ることが一つの習慣になったようだ。ここでも「リズム」という言葉を使ったが、まさに生活のリズムというのは音楽的であり、日々を生きることは音楽的であると改めて思う。そして、日々

の生活で生じる全ての思考や感覚は多分に音楽的であり、それゆえにそれらを音楽として表現することが可能であると思う。さらに重要なことは、日々の瞬間瞬間に湧き上がる思考や感覚を音楽として表現することが可能であるということだけではなく、それを実際に音楽として形にしたいという内在的な衝動が自分の内側にあるということだろう。その衝動に抗うことなく純粋に従いながら、今日も曲を生み出していく。

気がつけば、欧州での生活を始める数ヶ月前から執筆し始めた日記は2000本を超すほどになった。一方で、この数ヶ月間の中で作ってきた曲の数は、まだ50個に満たない。両者には40倍の開きがあるが、実質上はさらに大きな開きがあるだろう。つまり、内面世界を文章で表現することの力量とそれを音楽で表現することの力量の差は、数字上の開きよりもさらに大きなものに違いないということだ。しかし、改めてこれまで作ってきた50曲を眺めてみると、自分が辿ってきた小さな発達過程を見て取ることができる。

人間発達を専門にしているゆえか、興味深いことに、日々の作曲実践の最中においても知らず知らず自分の発達過程をつぶさに観察している自分が存在しており、自分がどのような発達過程にいるのかをある程度冷静に把握しているようなのだ。

これまでの過程を改めて振り返ってみると、作曲技術が伸びない停滞期をきちんと経験しているし、ある技術に関しては突然非線形的に飛躍するということも経験している。さらには、習得した技術だけをもとに何も参照することなく曲を作った時と、過去の偉大な作曲家の楽譜を参照にしながら曲を作った時の創造物にも質的差異があることがわかる。前者においては「機能レベル」が発揮され、後者においては「最適レベル」の発揮がなされていることがわかる。このように、技術的な側面だけを見ても様々なことに気づく。

技術的な側面に合わせて、作曲理論に関する知識面においても質的変容を遂げていることがわかる。ここからさらに、作曲実践を経て自分の美的感覚がどのように質的変化を遂げていくのかを観察したいと思う。そして今後は、音楽、とりわけ作曲に伴う知識的・技術的な変化と美的経験の変化を研究していくことに力を入れたいと思う。フローニンゲン：2018/1/20（土）07:23

No.667: Intelligibility in Music Composition

Of course, music composition is relevant to creating beauty, but as Schoenberg points out, it is related with intelligibility. The more I compose, the more I can understand Schoenberg's remark. When I composed based on one of Bach's works in the morning, I grasped a sense of intelligibility. Groningen, 13:27, Friday, 1/19/2018

2033. ブロッコリーの洗い方と仮想通貨に関する夢

今日も静かに一日が終わりに近づいている。充実した形で静かに進行していく時間。それはとても理想的な時間の流れ方ではないだろうか。

今日は午前中に作曲実践に従事し、午後からは「システマティックレビューの執筆方法」のコースで課せられている最終課題のレビューを完成させた。課題の最終レビューに並行して、オランダに戻ってきてからの新たな食習慣となったカレーを作った。

年始に日本からオランダに帰ってきて以降、近所のスーパーでタイ風カレーの素を購入し、種々の有機野菜を入れてカレーを作るようにしている。これまでは緑色の野菜が少なかったので、今日からブロッコリーを入れ始めた。アメリカで生活をしていた頃に作っていたカレーにもブロッコリーを入れていたのだが、その時は他の野菜と一緒にかなりの時間を煮ていた。改めてブロッコリーの調理方法について調べてみると、高熱によって栄養素が崩れることを防ぐために、茹でるぐらいで丁度良いことがわかった。さらには、これまでは茎の部分は捨てていたのだが、茎の部分にこそ栄養価が豊富であることもわかった。そうした情報をもとに、今日からは茎の部分も捨てずにカレーに入れることにし、つぼみの部分は茹でるぐらいの感覚でブロッコリーを入れることにした。

また、洗い方に関してもこれまでは間違った洗い方をしていたらしく、今までのやり方ではつぼみの中に入っている土や虫などを落とすことができないことを知った。これは調理後に気づいたため、今回はすでに時すでに遅しであるが、来週からはブロッコリーのつぼみを水の張ったボールに頭から20分ほど浸けるという洗い方を実践してみたい。

先ほど、完成したカレーを舌鼓を打ちながら食べている時、ふと昨夜の夢についてまた思い出していた。そういえば昨夜の夢の中で、友人と仮想通貨について意見交換をしていたことを思い出した。実際には、起床した時点でもそのことを覚えており、仮想通貨が夢に出てくる時は、私が現在保有している仮想通貨の値動きに何かがあるという奇妙な関係があるため、昼食前に保有中の通貨について久しぶりに調べてみた。すると、まさに本日日付でその仮想通貨に関する大きなニュースがあったようだ。何やら新しい機能を搭載したとのことである。

その仮想通貨は投機目的で保有しているわけではないので、普段は一切値動きなど確認しないのだが、仮想通貨に関する夢を見るたびにその通貨に何かが起こっているため、その時ばかりは値動きを含め、その動向を確認するようにしている。合わせて、仮想通貨の動向全般についてもその際に調べるようにしている。仮想通貨が現れる夢は不定期に見るため、そうした夢を見るごとに仮想通貨について調べてみると、仮想通貨を取り巻く状況の目まぐるしい変化とその革新性については驚かされる。

そうした調査をするごとに、通貨そのものへの再考を迫られ、仮想通貨の機能と今後について考えることを余儀なくされる。仮想通貨に関しては今はまだ投機目的の文脈で語られることが多いが、今後は間違いなく私たちの生活に密着した不可欠な存在となるだろう。私は仮想通貨に関して何か仕事をしているわけでないので毎日その探究をするわけではないが、少なくとも仮想通貨に関する夢を見たときには、仮想通貨の動向について調べようと思う。

それにしても、自分の無意識の世界で見る夢と現実世界の仮想通貨の動きがここまで連動しているというのは本当に驚くべきことである。フローニンゲン：2018/1/20（土）20:24

No.668: My Zest and Wish

I have a zest for sharing with children and adults how joyful and blissful to create own music. I wish to let them know the value of music composition in our life.

My wish will be attained someday through my continuous scientific, philosophical, and musical work. Groningen, 14:02, Friday, 1/19/2018

2034. 永住権の取得について

昨夜ベッドの上で横になりながら、今後自分はどこで長く生活をしていくのかをぼんやりと考えていた。これまで生活したことのある諸々の場所、旅行として訪れたことのある諸々の場所について思いを巡らせていた。

以前、アメリカやEU諸国で永住権を得るための手段について調べていたことがある。また、半年ほど前にフローニンゲン大学でオランダでの就労や永住に関する説明会があり、それに参加した時に様々な情報を得た。

アメリカにせよEU諸国にせよ、永住権の取得に関してはいろいろな手段があるが、私の場合はどれが最適かを考えていた。今のところ可能性が高いのは、その国に対する投資を行う形で永住権を取得することのように思える。アメリカに関しては以前に調べ、EU諸国に関しても同制度について調べてみると、やはり各国金額や条件が異なることに気づく。以前から気になっていた国としてハンガリーがあるのだが、どうやらハンガリーはEU諸国の中でも投資による永住権を取得しやすいことがわかった。

実際にはまだハンガリーに訪れたことがなく、どのような国なのか全くわからない。仮に生活しやすい国であり、そこで永住権が取れたとしても、ハンガリーに滞在し続けるかどうかなど全くわからない。ただし、ハンガリーで永住権を取得できれば、他のEU諸国で自由に生活することができる。

昨夜はベッドに横たわりながら、西ヨーロッパや中央ヨーロッパよりも北欧諸国で生活を営んでいる自分の姿の方が鮮明であった。この先どこの国で生活をするかは本当に未知だが、滞在国で永住権を取得する方法については情報を収集しておく必要があるだろう。

昨日無事に「システマティックレビューの執筆方法」のコースの最終課題のレビューを終え、今日の夕方にもう一度誤字脱字などを確認し、担当教授に提出したいと思う。その他に今日取り組むこととしては、現在ある日本企業と協働しているプロジェクトの資料を作成することだ。こちらに関しても今日中にドラフトを完成させることができたら幸いだ。

今日のそれ以外の時間は、いつもと同じように作曲実践に多くの時間を充てたい。ここ数日間バッハの曲を参考に曲を作っていたが、アーノルド・ショーンバーグのテキストの中で次はモーツァルトの曲が取り扱われることになったので、モーツァルトの作品を範にしながら曲を作っていく予定である。作曲実践に十分な時間を確保しながらも、今日は福永武彦氏の作品を読み進めたいと思う。先日に『忘却の河』を読み終え、数日前に『幼年』という作品を読み始めた。今日はこの作品をゆっくりと読み進めることができたらと思う。フローニンゲン：2018/1/21（日）07:18

No.669: Second Saturday

It's quite dark outside. The second Saturday after I came from Japan began. As usual, I'll keep a journal and compose music in the morning.

I plan to finalize the assignment for the systematic review course. The assignment consists of a series of exercises that reflect on weekly lectures. I already finished every exercise, so what I need to do is to review all of my writings and revise them. It will take one and half hour or two hours. This is my main task today. Groningen, 07:30, Saturday, 1/20/2018

2035. 魂の欲求

闇の向こう側にある空が少しずつ明るくなり始めている。しかし、空には雲がかかっているためか、外側の世界が明るくなるにはまだ時間がかかりそうである。

空に浮かぶ雲が黒く鬱蒼としたものに映る。だが、今日は晴れの予報が出ていることは、私の心を少しばかり和ませる。太陽が昇り、気温がもう少し暖かくなったら、今日は昼食前にランニングに出かけようと思う。

取り立てて何かを書き留めておこうという強い意思はなかったのだが、気づけば文章を書き始めている自分がいた。それは私が持つ何らかの欲求というよりも、魂の欲求だと言えるかもしれない。

日々の生活の中で四六時中日記を綴っていなければ、私の魂が黙っていないのである。私たちの魂はひょっとすると、表現されることを望むという性質があるのかもしれない。つまり、魂とは内在的なものであるに間違いはないが、それが内在的なものであるがゆえに、この世界に発露しようとする

願いを持っているかのようなのだ。私の魂は、とりわけ文章を書くことによって、あるいは曲を作ることによって、この世界に姿を現そうとする。

もしかすると、自分が日々日記を書き、作曲を行っているのは、魂からの求めに応じ、魂をこの世に具現化させるためなのではないかとすら思う。そう考えてみると、私は自らの魂の媒介者なのだろう。

今日は日曜日ということもあってか、八時前に通りを行き交う人は少ない。依然として闇に包まれたままの寒さの厳しい世界の中を、誰が休日に歩きたいと思うだろうか。そうした人はいるにしても希少であり、彼らとて何かしらの理由があるからこの時間帯に外に出ざるをえないのだろう。

街灯が白みを帯びた黄色い光を発している。姿は一向に見えないが、カラスのような図太い鳴き声がどこからともなく聞こえて来る。

先日の早朝、フローニンゲンの街に雪が降っていた時の光景をふと思い出した。窓の外を見ると、通りにはうっすらと雪が積もっていた。そこで私は、雪解け後に待っている世界について思いを馳せていた。生命力に溢れた甘美な世界が待っているに違いないと私は思った。

まだまだ寒い日が続いているが、雪解け後の世界をふと想像する自分がいる。そうした想像が生まれた瞬間、雪解け後の世界はすでに今この瞬間に顕現していると言えないだろうか。

私たちが持つ想像力というのは、本当に尊いもののように思える。そのおかげで私は、どのような環境にあっても自らの生命を発露させながら生きることができているように思うのだ。フローニンゲン：2018/1/21（日）08:00

No.670: Rhythmic Sense

In addition to a sense of melodies, I need to cultivate my rhythmic sense. Referring to past music scores in order to grasp how great composers embody their rhythmic sense in their works would be educational to me. Probably, I can also learn harmonies from their music scores, my present focuses are melodies and rhythms. Groningen, 08:46, Saturday, 1/20/2018

2036. バッハの曲とモーツァルトの曲

昨日に引き続き、早朝からモーツァルトのピアノソナタのある曲を参考しながら曲を作っていた。ここ数日間バッハの曲に範を求めていた時には、バッハが曲に込めた意図とその技巧に思わず唸ってしまうことが多々あった。

バッハの曲は法則の宝庫であり、ある法則を見つけることができればそれは自分の曲に転用しやすく、過去の多くの作曲家がバッハの曲に範を求めたというのは納得ができる。一方で、モーツァルトの曲はどうも参考にしにくい。間違いなくモーツァルトも曲の中に意図と技巧を散りばめているはずなのだが、仮にその一端が掴めたとしても、それを自分の曲に応用するのはなかなか難しいという実感を得ている。

これは多分に現在の私の作曲技術や理解力の次元によるものだと思われるが、もしかするとより根源的に相性のようなものがあるかもしれない。あるいは、モーツァルトの曲はバッハの曲と比べて人間が自らの手で作り上げた美というよりも、モーツアルト本人が述べているように、音楽のイデアのようなものが体現された美を宿しており、それはまさにモーツァルトが持つ独自の才能の産物だと言えるかもしれない。一方バッハは、より構成的な形で美を創出していったという印象があり、美の創出方法を学ぶ上では範を求めやすい。端的に述べれば、作曲技術を高めるに際して、バッハの曲の方が教育的だと言えるように思える。二人の曲に範を求めてみた時の経験からすると、少なくとも私の場合はそのように言える。

この数日間バッハの曲を参考にして自らの曲を作っている時は、音楽を自発的に創出する喜びと構成的に美を生み出す喜びの二つがあった。それはもしかするとバッハも感じていたものかもしれない。他方、モーツァルトは音楽と美をどちらも共に自発的に生み出す喜びを感じていた可能性がある。人為的ではなく、混じり気のない何か純粋なエネルギーに促される形で曲を生み出していったのがモーツァルトという作曲家の特徴なのかもしれない。

バッハにせよ、モーツアルトにせよ、他の作曲家の曲を参考に曲を作ると本当に学びが多い。当たり前のことかもしれないが、完全にリズムを模倣したとしても、調を変え、メロディーを変えれば全く別の曲が生まれる。それは私にとって大きな驚きであり、その驚きを味わえるだけでも作曲が楽しく、

また奥深く感じられる。モーツァルトの曲に範を求めてとりあえず一曲を作った後に、今度はフォーレの曲を参考にしたいと思った。特にフォーレの舟歌には惹かれるものが多々あり、どれか一曲を参考にしようと思ったが、手元にあるフォーレの楽譜は舟歌が掲載されていない巻であり、もう一つの巻は到着を待っているところだったことに気づいた。

今のところ私は、バッハから集中的に学んだ方がいいのか、それとも今までと同様に様々な作曲家から少しずつ学びを得た方がいいのか決めかねている。バッハから汲み取れるだけのものをまず汲み取った方がいいように思えるし、私の性格上、多様な作曲家の曲を行き来しながら作曲実践を継続させていく方がいいようにも思える。この辺りのさじ加減は非常に難しい。フローニンゲン：2018/1/21（日）13:09

No.671: Music Composition as Creative Problem-Solving

If we regard arts just as a product of unconscious processes, we would miss the objective aspects of arts. These aspects can be and should be investigated in a scientific way. In my near future, I'll conduct scientific research on music composition as creative problem-solving. Groningen, 20:44, Saturday, 1/20/2018

2037. 身体の充実

この世界の様々な場所で生活をし、様々な国籍の作曲家から学びを得ようとする自分の姿勢は、どこか私の魂の特性と関係しているのではないかと思う。

以前の日記で書き留めていたように、私の魂が内在的に持つ特性は、「遍歴性」と呼べるものだろう。私は決して無闇やたりに生活拠点を変えているわけでもなく、探究領域を無闇やたりに変えているわけでもない。大抵は、ある場所には必ず一定期間滞在しているし、ある特定の探究領域を一定期間探究し続けている。しかし、私の魂は永続的に一箇所に留まることを望んでいないようなのだ。

仮に一箇所に留まり続けているように思えても、絶えずそれは動きの中にあると言える。魂が持つ遍歴性とは非常に動的な性質なのだろう。

午前中にモーツァルトの曲に範を求めながらとりあえず一曲作った。今のところ私は、この日記のように、一つ一つの曲の質にはそれほどこだわっていない。その瞬間瞬間に表現されることを待っているものだけを、表現を望む分だけ外側に形として表現するようにしている。そのような発想を持って、とにかくある一定量を超えるまでは大量に曲を生み出していく必要がある。

この日記においてもそうだが、文章にせよ曲にせよ、まだどちらも圧倒的に量が欠落していることを私は知っている。日記に関しては10,000記事、曲に関しては1,000曲ほど生み出すことができれば、何か少しばかり見えてくるものがあるだろう。今はまだその途上に過ぎず、ようやく出発したところにいることを忘れてはならない。

ピカソが晩年に、「自分の全ての作品はまだ実験中のものである」と述べていたように、文章と曲を生み出すことに関して、まだまだ膨大な量の実験を経ていかなければならない。

作曲実践が落ち着き、福永武彦氏の『幼年』を幾分読み進めた後に、近所の河川沿いのサイクリングロードにランニングに出かけた。今日は天気に恵まれた日曜日である。

40分弱ゆっくりとランニングをし、自宅に帰ると、やはりこうした適度な運動は日々の生活をより充実したものにしてくれると思った。一昨日も夜に、この世界で生きる上での身体の重要性について考えを巡らせていた。

自らの身体が充実しない限り、日々の生は充実しないのではないだろうか。生は私たちの健全な身体を通して初めて充実した形で営まれる。ランニングによって適度に身体を動かしたことの意義は、昼食後の今この瞬間の充実さを見てみれば明らかである。

今日はこれから仮眠を取った後に、福永武彦氏の『幼年』を読み切りたいと思う。この作品を読んだ後に、現在取り組んでいる協働プロジェクトに関する資料の作成に取り掛かる。天気に恵まれた穏やかな日曜日の午後は、そのような形で過ごしたい。フローニンゲン：2018/1/21（日）13:32

No.672: Music Scores as Inspiration Stimuli

Music scores created by past great composers will be not only scaffolding but also stimuli for my inspiration forever. I knew that Picasso utilized Manet's works to stimulate his creative

power. I'll do the same thing toward eminent composers' works. Groningen, 20:52, Saturday, 1/20/2018

2038. あの太陽のところまで

穏やかな心の機微に合うような音楽をかけようと思い、すっと選んだのはグレン・グールドが演奏するブラームスのピアノ曲だった。この曲は随分と昔に自分のパソコンにダウンロードされたものでありながら、これまであまり聞いたことがなかったように思う。直感的に選んだこの曲は、今の私の心の動きに完全に合致しているようだ。

昼食を済ませ、仮眠から目覚めた後に、福永武彦氏の『幼年』を読み終えた。この作品を読みながら、物語の内容はどこか自分にも当てはまることが多いのではないかとしきりに思っていた。

他者の中に自分を見出し、自分の中に他者を見出すような感覚が自分を包んでいた。この作品に対して何かを書きたいという心の疼きのようなものが芽生えているのだが、果たしてそれは何を書くことを望んでいるのかが定かではない。ただし、この作品によって、私の意識の最奥が動かされたことは確かである。

生きていく過程の中で、私たちは日々、諸々の記憶を無意識の大海に蓄積させていく。ある記憶は無意識の大海の表層で幾日か漂い、ある記憶は直ちに無意識の深層に落ちていく。この作品は、どこか私の無意識の深層に長いこと堆積されていた種々の記憶を掘り起こすような働きがあったような気がする。いや、それは掘り起こすというよりもむしろ、深海魚がそっと海底から顔を出し、深海を泳ぐ時に沸き立つ海底の砂埃のような類いの感覚である。海底の砂埃として舞う諸々の記憶が今、様々な形で交わり、結びつき、自分の記憶の世界をまた少し変容させる方向に動いている。

この一年以内に何度か夢の中で仮想通貨が現れることがあったことは、すでに過去の日記に書き留めている。仮想通貨を取り巻く社会的な現象と私の無意識が繋がっていることはどのように解釈できるのか、それに対する関心は絶えない。

自分の無意識の所有権は私だけにあるのか否か。最近思うのは、その所有権は私個人に属するものではなく、間違いなくこの世界に共有されているということだ。そうでなければ、あれほどまでに仮想通貨の個別具体的な出来事と私の無意識が結びつくはずはないのだ。

この世界のどこでいかように生活を営もうとも、この世界と私は切っても切れない関係にあることを知る。たとえ日本にいなくても、日本を取り巻く集合意識は常に私の中にあり続けるだろう。さらには、この世界で生きている限り、世界を取り巻く集合意識が自分に影響を与え続けることに疑いがなくなった。それとの関係で自らの仕事を捉える必要があるだろう。そう捉えなければならない。自分が今この瞬間に言葉を生み出すことも、曲を生み出すことも、自分の意識とは別の次元にある集合的な意識が影響を与えていることに自覚的にならなければならない。

一つの言葉、一つの作品、一つ一つの仕事は、属人的かつ属人的ではないというのはそういうことなのだ。個人の仕事は個人から生み出されるという単純なものではなく、個人と集合から生み出され、それが再び個人と集合に還っていくような性質を持つものなのだ。

この人生を歩く過程の中で、自己が自己に還っていくというのは、さらに突き詰めて言えば、自己が自己を超えた集合的なものに還ってくということを意味するのかもしれない。きっとそれが普遍性に至る道なのだろう。

夕暮れ前の太陽が優しい光を地上に届けている。日々このように生きていけば、私はあの太陽のところまで行けるだろうか。太陽への帰還に向けて、今日もまた残された時間の流れの中で生き続けたいと思う。フローニンゲン：2018/1/21（日）15:30

No.673: The Itinerancy of Our Spirit

We might be able to regard the intrinsic nature of our soul as “itinerancy.” Even though our soul looks like residing in one place, it would be always in motion. Where does our soul come from and where does it go? My soul is always peripatetic in this world. Groningen, 08:43, Sunday, 1/21/2018

2039. 水泳について

昨夜は少々快活な夢を見た。中学校時代の友人たちと校庭で踊りの練習をしている夢だった。

どうやら私は別の踊りのグループに所属していたようなのだが、急遽そのグループに参加するようになったらしい。その時までに所属していたグループの踊りと随分と異なる動きが要求され、新しいグループでの踊りに四苦八苦していたのは確かだった。しかし、踊ることによる独特の快感は共通しており、私は踊ることの虜になっていたこともまた確かだった。

そもそもこれらの踊りは文化祭の出し物の一つのようであった。各学年の男女がそれぞれいくつかのグループに割り振られ、合計ではかなりのグループがそれぞれの踊りを披露することになっていた。一つ一つのグループは7名から10名ほどの規模であった。この夢に関してはその他にも様々に印象に残っている場面があるのだが、それらはどれも断片的であり、なおかつ言葉として表現することが難しい。言葉から滑り落ちてしまう情景や感情などが夢の中にあった、ということだけは明記できる。

やはり内的現象の中には容易に言語化を寄せ付けないものが存在していることがわかる。昨夜の夢はそうしたことを改めて確認させてくれるには十分であった。

今日は普段よりも随分と遅く、七時過ぎに起床した。一度六時に目を覚ましたのだが、今日はもう少し寝ていようという意識が働いた。おそらくそれは、昨日に普段以上の距離をランニングしたことと関係しているかもしれない。ランニングによってもちろん心身の調整が図られたのだが、その調整後の心身をさらに調整するために、十分な睡眠が必要だったのだろう。

昨日は晴れとはいえ、かなり気温の寒い中ランニングに出かけた。ランニングから帰り、昼食を済ませた後、水泳をまた始めたいという思いが突如として現れた。思い返してみると、大学時代もゼミの後は二人の友人と毎回大学のジムに足を運んで水泳をしていたし、社会人になってからも週に一度は近くのジムのプールで泳いでいた。さらには、サンフランシスコとロサンゼルスに住んでいた頃には、住居の敷地内に共同プールがあった。サンフランシスコ時代にそのプールを使ったのはほんの数回程度だったが、ロサンゼルスに住んでいた頃は週に一度はそのプールを使ってリフレッシュしていた。そのようなことを思い出しながら、また水泳を始めたいという思いが強くなっていた。

調べてみると、ランニングよりも水泳の方が体に負担がかからず、水泳には種々の独自の効果があることがわかった。水圧によって血液循環を良くしたり、心肺機能を鍛えることはもちろん、これまでも感じていたように、人間は水に浸かることによって心身が深いリラックス状態になることは見逃せない効果である。私は生後数ヶ月から水泳を始めたが、もしかすると水泳は一生涯続けることのできる運動なのかもしれないと思うようになっている。

オランダは夏でも涼しい気候のためか、プール付きの家をあまり見ない。今の家には個人用のプールはおろか共同プールもない。もちろん、フローニンゲン大学のジムに行けば泳ぐことができるのだが、自宅から歩くと少々時間がかかる。贅沢かもしれないが、昼食前か夕食前に気軽に泳げるような環境があれば理想的である。仮にこの秋から再び米国に戻ることになったら、共同プールがあるマンションに住むか大学のジムに近い場所に住むようにしたいと思う。日々の生活に水泳を取り入れようという気まぐれだが真剣な考えをしばらく温めおくことにしたい。フローニンゲン:2018/1/22(月)08:08

No.674: Actual Practice and Theory

Since I've recently spent much time on creating music, I think I need to spend some time on learning music and composition theories. The back and forth movement from actual practice to theory would be ideal. Whereas theories without practice are useless, practice without theories is also restricted. It's time to go back to theory again. Groningen, 14:37, Sunday, 1/21/2018

2040. ブレーキの利かぬ夢とシューベルト

天気予報を確認すると、今日から週末までは一日を通じて断続的に雨が降るような日々が続きそうだ。今朝も起床時に雨がパラパラと降る音が聞こえていた。

今少しばかり空気の入れ替えのために書斎の窓を開けているのだが、通りを走る車の音を聞いていると雨に濡れた道の上を進む独特の音が聞こえる。その音を聞きながら、ハッとするように今朝方見ていた夢の断片を思い出した。それは今朝の夢だけではなく、私の夢の中にたびたび現れる一つの象徴的な事柄である。現実世界とは対照的に、私は夢の中で車を運転することがあるのだが、その際にブレーキの利かせ方がうまくわかっていないようなのだ。

思い出してみると、ある夢の中では一切ブレーキを踏むことなく走り続けていることさえある。足元にブレーキがあるはずなのに、その場所がいまいち飲み込めていないのと、踏む方をよく掴んでいないようなのだ。今朝方の夢の中でもそれと同じようなことが起こっていた。狭い路地の道を最初はゆっくりと進んでいたのだが、徐々に速度が上がり、それでもブレーキを踏むことはほとんどなかった。

もちろん最初は、見通しの悪いところでは速度を落とし、一時停止を要求する箇所では止まろうとしていたのだが、ブレーキがどうもうまく利かないのである。本来止まるべきところでも車が完全に止まることはなく、どうしても緩やかに前に動いてしまう。そうした現象に対して私はある種の諦めの感情を持つようになり、そこからはブレーキを踏むことなく、場所のわからぬ目的地に向かって進んでいた。

通りを走る車が水しぶきを上げながら進む音を聞きながら、そのようなことをふと思い出した。

今日もこなすべき仕事をしながらも、作曲実践に多くの時間を充てたいと思う。ただし今日からは、再び音楽理論と作曲理論を学ぶことにも時間を充てたい。実践の重要性を強調するあまり、ここ最近は理論の学習がおろそかになっていた。実際に曲を作る際や他の作曲家の作品に範を求める際にも、観点が必要であり、そうした観点を提供してくれるのが理論だと思う。一日に30分でもいいので、音楽理論か作曲理論の解説書に目を通したいと思う。これもまた新たな習慣としたい。

この二日間を通じて、モーツァルトの作品に範を求めるのは今の私にはあまり賢明ではない、ということがわかった。今手元にあるアーノルド・ショーンバーグのテキストは、ちょうどシューベルトの作品の具体例を示している。

昨年の三月にウィーンを訪れた時、私はシューベルト博物館に足を運んだ。そして、その後学会のために訪れたザルツブルグの街で、作曲をすることを決意させる啓示的な体験に見舞われた。その時私は、シューベルトがこの世を去った年齢であった。シューベルトがこの世を去った年齢から作曲を始めたという事実が、シューベルトへの特殊な思いを喚起させる。

また、シューベルトのいくつかの作品に対して、私の内側が多いに共鳴することがあるのも確かだ。そうしたことを考えると、シューベルトに範を求めるというのは何か必然的なことのように思われる。と

りあえず今日から少しばかりシューベルトの作品に範を求めたいと思う。フローニンゲン:2018/1/22(月)08:39

No.675: Work Cycle

I totally lost my sense of time. It seemed that I immersed myself in my work. It is already dark outside.

From now, I'll compose music a little bit, then I'll elaborate my research proposal. After the elaboration, I'll spend the rest of time to compose music. The cycle of my work is ideal.
Groningen, 17:13, Monday, 1/22/2018